

一つ風呂浴びに帰宅していた班目春樹・原子力安全委員長と突然の東京電力爆破予告 / スcoop公開!
『海江田ノート』原発事故との闘い

本誌記者の目の前に、3冊のノートがある。ノートの持ち主は、福島第一原発の爆発事故に中心となって立ち向かった人物である。

海江田万里・元経済産業相(63)。彼は事故直後から、原発を管轄する担当大臣として、誰が、どこで、何を語り、事態がどう推移したかについて克明に記録してきた。その海江田氏が本誌に口を開いた。

「このノートは、事故直後から私が経済産業相を辞任するまでの176日間の、原発との闘いの記録であり、私が実際に目の当たりにした真実の記録です。

今年に入って、原子力災害対策本部など政府の震災関連組織で議事録が作成されなかったことが明らかになり、政府の情報管理の杜撰さが厳しく批判されています。しかし、私はそこに参加していました。私のノートを、事故から1年が経過する今、世に出そうと思います。

事故直後は走り書きですが、東京電力の本店に統合対策本部が設置され、そこに常駐するようになってからは克明なメモを残しています。このメモの中には、公になっていない場面で誰がどんな発言をしたのかを記してあります。

私に今できること、それは、人々の記憶から震災の時、何があったのかが抜け落ちていく中、“生”の記録を後世に残すことです。この記録は、還暦を過ぎた私が見届けることのできない、30年後、40年後に必ず意味を持つはずで

本誌は海江田氏から、事故発生から時系列で起きた出来事の聞き取りを始めた。

3月12日午前9時04分、ベント(圧力容器内に溜まった放射性物質を含む蒸気を外部に排気すること)作業を実施……。同日午後2時には1号機で「ベント成功」の報告があった。その日の早朝、菅直人首相(65)は、原子力安全委員会の班目春樹委員長(63)を伴ってヘリで原発上空を視察し、そのことがベントの遅れに繋がったと批判されている。海江田氏は、ノートを繰りながら、当時の様子を語った。

「第1原発の1号機でベントが成功したとの報告を受けた時のことです。それでも1号機には冷却水が不足する恐れがあり、事態は切迫していました。この前後、原子力災害対策本部のメンバーは、拠点を首相官邸5階の応接室に移しています。危機管理センターの部屋は非常に手狭で、携帯電話も使えないなど不便だったからです。この応接室で最初に話し合わなければならなかった議題は、1号機に注水している真水が切れた後、どうやって炉心を冷やせばいいのか、でした。

しかし、ふと見渡すと、班目委員長の姿がなかったのです。私は周囲に問い質しました。『班目委員長の姿が見えないようだが……。』すると、こんな答えが返ってきたんです。『総理と現地視察をした後、(東京都)文京区内の自宅に帰ったようですが』。頭から血の気が引くような感覚に襲われました。

私は、『すぐに呼び戻してくれ! 着替えに帰るくらいならいいが、家でのんびりされでもしたら困る』と声を荒らげました。閣僚や事務方の役人で、事故発生後から自宅に帰った者などおらず、着の身着のまま、食事でも満足に摂らずに事態収拾に当たっていました」

班目氏が首相官邸に姿を現したのは、約1時間後。髪やひげがさっぱりした様子から、一見して一つ風呂浴びてきたということが分かる格好で、悪びれもせず、官邸の応接室のソファにどっかり腰を下ろしたというのだ。しかし、班目氏が会議に戻って間もなく、事態は暗転する。3月12日午後3時36分、1号機で水素爆発と思われる爆発が起きたのだ。

「この水素爆発を予測できなかった班目氏は、自信を喪失したのでしょうか。その直後、菅首相から『海水を入れて、再臨界しないと言い切れるのか』と質問された際、周囲に聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな声で、『しないとは言い切れません』と返答し、注水中断を指示する事態を招いてしまったのです」

3月15日、政府の原子力災害対策本部は、東京電力本店（東京都千代田区）に乗り込み、「政府・東京電力統合対策室」を設置した。以後、ここを本部として、ヘリコプターを使った空中からの海水散布や、3月22日からは、高層ビルの建設現場などで使用される生コン圧送機「キリン」による放水など、人類は“怪物”への「反撃」を試みていく。この頃の原因を語る上で、東電トップに逆らい、独断で原子炉への海水注入を続けた福島第一原発の吉田昌郎前所長(57)の存在は極めて大きい。海江田氏は、吉田氏との初会談をノートを見ながら回想した。

「吉田所長と面談したのは、3月27日の午後です。事故以来、初めて吉田所長が現場の福島を離れて東電本店に報告に来るといっているので、東電にお願いし、二人きりで会う機会を作ってもらいました。場所は東電5階の会議室。節電のため薄暗い部屋に吉田氏が入ってきました。

吉田氏とは、東電本店に詰めるようになってから、毎日のようにテレビ電話で話していましたが、直接会うのはもちろん初めてです。長年文通をしていた友人に初めて会うような感覚でした」

海江田氏によると、二人が交わした会話は、次のようなものだった。

「本当にお疲れ様です。最初はずいぶん無理も言いましたが、あなたの頑張りで何とかここまで来ました」

「ありがとうございます。私もできるだけことはしようと思っていました」

「私はタバコを吸うのですが、吸っても構いませんか?」

海江田氏がこう尋ねると、吉田氏は相好を崩したという。

「よかった。私もタバコ吸うのですよ」

二人でタバコを燻らせながら向き合って座り、語り合ったという。

「吉田氏は指にタバコをはさみながらぼつりぼつりと語り出しました。地震当時は所長室にいたこと、地震そのものに発電所は耐えられると思っていたこと、襲ってきた津波を見て『これはダメだ』と観念したことなどです。政府に要望があれば聞きたいと伝えたと、放射線対応ができていない免震重要棟の遮蔽性や密封性を高める工事や、作業員の居住空間の改善策といった、現場の作業員の安全や生活に配慮した要望を出してきました」

海江田氏がノートのページを進め4月に入ると、「低濃度汚染水」の記述が増える。集中廃棄物処理建屋（集中ラド建屋）や5、6号機に溜まった1万t以上の汚染水が、海江田氏を苦しめたのだ。2号機のタービン建屋などの地下に溜まった高濃度の汚染水を海に流れないように運ぶ先は、集中ラド建屋などのいくつかの建屋とタンクにするという方針が立った。問題は、集中ラドや他の建屋に溜まった低濃度の水の放出先だった。

「低濃度汚染水を海へ放出して建屋を空にし、そこに高濃度の汚染水を運び込む。この方法しかないとも思いました。その上で私は、放出にあたっての環境への影響を少なくするための手段と、モニタリング(測定)強化の具体的な方法を確保するよう強調しました」

原子力安全・保安院は、東京電力に対して、「今回の（低濃度汚染水の放出）措置は人の健康に有意な影響はなく、大きな危険回避のためにやむを得ない」との判断を伝達。同時に、原子力災害現地対策本部経由で、原発の周辺自治体に FAX などで低濃度汚染水の放出を連絡した。

だが、この決定に重要な点が抜け落ちていたと、海江田氏が振り返った。

「私の頭の中からは、周辺諸国への事前通知が抜け落ちていました。海洋への影響を正確に把握できるよう、モニタリングポストを増やすことは考えていたのですが……。責任者として、周辺諸国に対する配慮が十分でなかったという批判は受け止めます。周辺諸国へのブリーフィングは外務省が行いました。後になって分かったことですが、『海洋への放水を本日夕刻に開始する』との外務省から全外交団へ向けた FAX とメールの発信時間は、実際に福島第一原発で集中ラドの汚染水を海へ流し始めた時間に比べて、2分ほど時差がありました。私のノートの記述では『1903 (19時03分) 放水スタート 集中ラド』となっています。一方、全外交団向けの FAX・メールの発信は午後7時05分でした」

刻一刻と事態が変化し、一つの判断ミスで後世が変わるという緊迫感の中、原発に立ち向かうスタッフの食事情も、海江田ノートには記されていた。

「特に事故直後は、霞が関のコンビニも棚が空っぽで、秘書官は弁当探しに苦労したようです。私は子供の頃から、食欲がない時でもいなり寿司だけには手が伸びる。秘書官は分かっている、いなり寿司の弁当は私の定番メニューになっていました。それでも、事故発生から1ヵ月近く経つとマンネリ化する。そんな時に食べたペヤングソースやきそばが意外に美味しく、何度かリクエストしたものです。こんな昼食事情ですから、鳩山由紀夫前首相が豪華なにぎり寿司を差し入れてくれた時は、破格の昼食でした」

ノートを見ながら語る海江田氏の手が止まったのは、4月7日のページだった。

「前日の6日から、1号機の原子炉へ窒素の封入が始まりました。しかし、午後10時54分に配管にひび割れが見つかり作業が一時中断してしまい、家に帰っても眠れぬ夜を過ごしたんです。7日は、朝8時20分に東電本店へ入り、窒素封入の経過を聞いていました。『格納容器内の空間が思ったより小さく、封入する窒素の量も減ります』などと、東京電力フェローの武黒一郎氏から報告を受けていたんですが、突然、SPに腕を引っ張られたのです。SPは、『ここを移動して下さい』と囁くと、半ば強引に私を地下の駐車場まで連れて行き、車に乗せ、そのまま東電本店を後にしました。困惑して『何か起きたのか』と尋ねると、彼はこう答えたのです。『先程、東京電力に爆破予告の電話が入ったのです』。結局はイタズラ電話でしたが、経産省に1時間ほど缶詰にされ、おかげで、その日の朝の全体会議に参加できませんでした」

ここに紹介したエピソードは、海江田ノートのごく一部にすぎない。ノートの全容を克明にすることが、再び同じ道を辿らないための礎になる……。海江田氏は「原子力政策の総責任者だった者の運命だ」と言い、その覚悟を決めている。



4月9日、福島第1原発を視察し、吉田昌郎所長（右）と会談する海江田氏。初公開画像